

加工用キャベツ 栽培マニュアル

(夏まき秋冬どり)



令和2年2月

加工用キャベツ栽培のポイント

- 加工用キャベツは、一斉収穫による収穫作業の省力化が収益性向上を図る上で重要である。そのためには、生育を揃えることが重要であり、齊一な苗の育成やライムソワーやうね立同時施肥機等による基肥等の均一な散布が不可欠である。
- 収量を確保する大玉生産のためには、外葉を大きく生長させる必要がある。そのため①根が回りきる前の若苗定植による速やかな活着、②排水対策の徹底、③生育初期の肥効を維持させる追肥が重要である。
- カルシウム欠乏症（縁腐れ、芯腐れ）の発生を防ぐための乾燥時のかん水と、アオムシやヨトウムシ、黒腐病等の病虫害対策として定期的な防除を徹底する。

1 栽培こよみ

	6月	7月	8月	9月	10月	11月
10月中下旬どり	VV 排水対策	○ は種 7/10~7/15	△ 定植 8/5~8/10	↓ 追肥 ↓ 防除 ↓ ↓	□ 収穫	
10月下旬～ 11月中旬どり	VV 排水対策	○ は種 7/15~7/25	△ 定植 8/10~8/20	↓ 追肥 ↓ 防除 ↓ ↓	↓	□ 収穫
11月中下旬どり	VV 排水対策	○ は種 7/15~7/25	△ 定植 8/10~8/20	↓ 追肥 ↓ 防除 ↓ ↓	↓	□ 収穫

2 品種

10月中下旬どり	輝吉 (日本農林)	球形は平玉で玉伸びが良く、非常に栽培し易い。 耐暑性があり黒腐病に強く栽培し易い。
10月下旬～ 11月中旬どり	おきな (タキイ)	肥大がよく、L～2L玉の大玉収穫が可能。 裂球が遅く在ほ性に優れる。 高温期の収穫で、結球基部にすす症が発生しやすい。黒腐病が発生しやすい。
11月中下旬どり	湖月 SP (タキイ)	中生種。収穫適期を過ぎた後も肥大が持続し、裂球が遅い。

3 育苗

(1) は種の準備

- ・育苗日数は、20～25 日であり、苗が老化すると、活着が遅れるため、定植予定日から逆算して、は種日を決定し、準備を進める。
 - ・必要数：種子 4,000 粒／10a 、セルトレイ：30 枚/10a、
(150cm×株間 35cm×2 条千鳥植えの場合の理論定植本数：3,800 株/10a)
 - ・ハウスは、日中の直射日光があたらないよう遮光ネット（遮光率 30%）等で遮光する。
 - ・床土水分の均一化（余分な水分を下から抜く）による苗の斉一化と、根鉢形成の促進（若苗での機械定植の精度向上と活着・初期生育促進）のため、セルトレイを入れる育苗箱は野菜専用（メッシュタイプ）を用いるとともに、ベンチで育苗する。
- ※ 野菜専用育苗箱がない場合は、裏返したコンテナ又は水稻育苗箱の上に、セルトレイを直接置く。ただし、ダイヤカットの水稻育苗箱は、水が抜けない部分があるので使用しない。



野菜専用育苗箱（メッシュタイプ）



コンテナと垂木を用いたベンチ育苗の例

(2) は種作業

- ① 育苗箱にセルトレイを入れ、セルトレイに育苗床土を均一に詰める。
- ② 各セルに 5～10 mm の深さのくぼみをつけ、1 粒ずつは種する。
- ③ は種後、くぼみがなくなるよう覆土し、セルトレイ上面に合わせて均し、余分な覆土を落とす（覆土厚 5 mm 程度）
- ④ 育苗ハウスが高温となる夏期の育苗は、（発芽までの）育苗床土の高温の影響により発芽不良となりやすい。このため、は種後のセルトレイに種子の吸水に必要なだけ軽くかん水した後、倉庫等の日の当たらない涼しい場所に 2 晩積んで発芽直前まで置く。
- ⑤ 3 日目の朝にハウスに並べ、たっぷり（セルの底穴から水が染み出る程度）かん水する。

＜は種作業の流れ＞



①育苗床土を詰める。
桶等を使えば、余分な床土が落ちることを気にせず、作業できる。



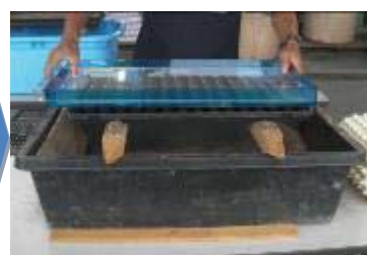
②振動を与え、床土を落ち着かす。
(床土が不十分なセルは窪む。)



③窪んだセルには、床土を
足し、均一にならす。



④鎮圧ローラーで、均一な深さ
で播種穴を開ける。



⑤播種板で1粒/セル播種する。



⑥覆土して、均一にならす。

作業効率の目安 : 30枚(10a分)/1時間(作業人数1~2人)

＜水稻育苗箱を裏返してベンチ代わりにする場合の効率的な作業方法の例＞



①1枚だけ、先に裏返して置
いておく。



②セルトレイを取り出し、先に裏
返して置いた育苗箱に置く。



③空いた育苗箱を、次のセルトレ
イのために、裏返して置く。

(3) 育苗管理

- ・ハウスは、全面開放し、風通しを良くする。
- ・かん水は原則、毎朝実施し、昼前に確認し、乾いていれば、再度かん水する。
- ・夕方のかん水は徒長の原因となるので行わない。
- ・肥切れを防止するため、は種後15日頃と20日頃の朝に、液肥(やさい隣加安S540の500倍液など)をかん水代わりに散布する。
- ・害虫発生が見られれば、プリンス粒剤(使用量:セルトレイ1箱あたり20~30g、使用時期:は種時~定植前)をセルトレイの上から均一に散布し、軽くかん水して、葉に付着した薬剤を落とす。
- ・は種後20~25日で、本葉2.5~3枚となり、根鉢が形成されれば、速やかに定植する。



定植適期の苗の姿
(根鉢が適度に形成されている)

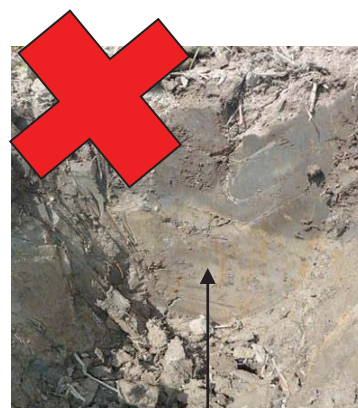
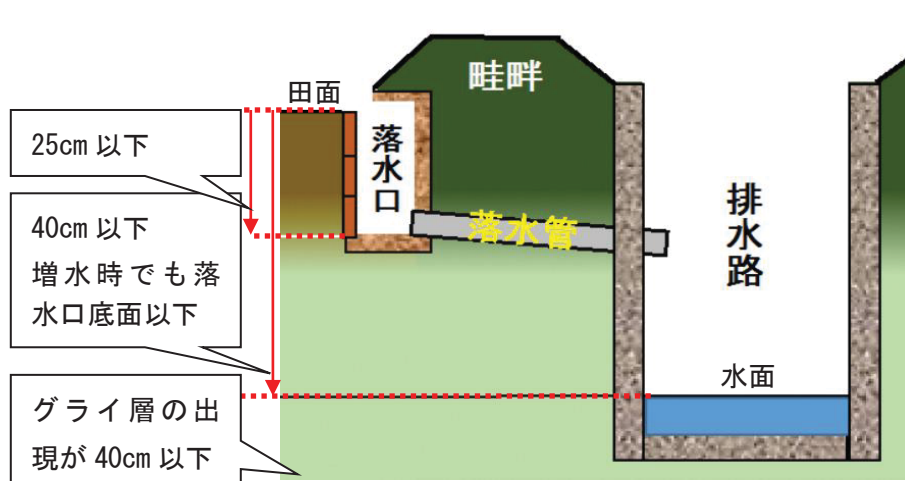
4 本ほ管理

(1) ほ場の選定

- ・ 前作終了後、直ちに「排水対策のための野菜作付予定ほ場調査及び対策早見表」（15～16 頁参照）に基づき、ほ場調査を行い、排水がよく、作付に適したほ場を選定するとともに、効果的な排水対策を決定する。

<作付に適したほ場の条件>

- ・ 地下水位ができるだけ低い（グライ層（還元層）※が見られないか、出現位置が田面より 40cm 以下の深さ）。
- ・ 本暗渠が敷設されているなど、地下排水性がよい。
- ・ 周囲ほ場が畑作（大豆、大麦、野菜）であるなど、周囲のほ場や用水からの浸水の恐れがない。
- ・ 落水口底面ができるだけ深い（落水口底面が田面より 25cm 以下）。
- ・ 排水路の水面が、増水時でも低い（田面より 40cm 以下）。
- ・ 耕土が深い（作土深 25cm 以上）。
- ・ 雑草の発生が少ない。



※グライ層（還元層）
地下水位が高く、鉄分が還元し、青灰色を呈する層位

(2) ほ場準備・排水対策

- ・ 降雨等の影響で、ほ場が乾かず、計画どおりに定植作業が実施できなかつたり、碎土率が低下し、活着・初期生育が劣つたりすることがないように、定植の2週間以上前までに、排水対策を実施しておく。

①額縁排水溝の設置

- ・ 地表排水を向上するため、スクリーオーガ等で、ほ場周囲に深さ 25 cm以上の額縁排水溝を設置する。
- ・ 排水溝の水がほ場外に排水されるよう、額縁排水溝は必ず落水口につなぐとともに、落水口は深く掘り下げる。



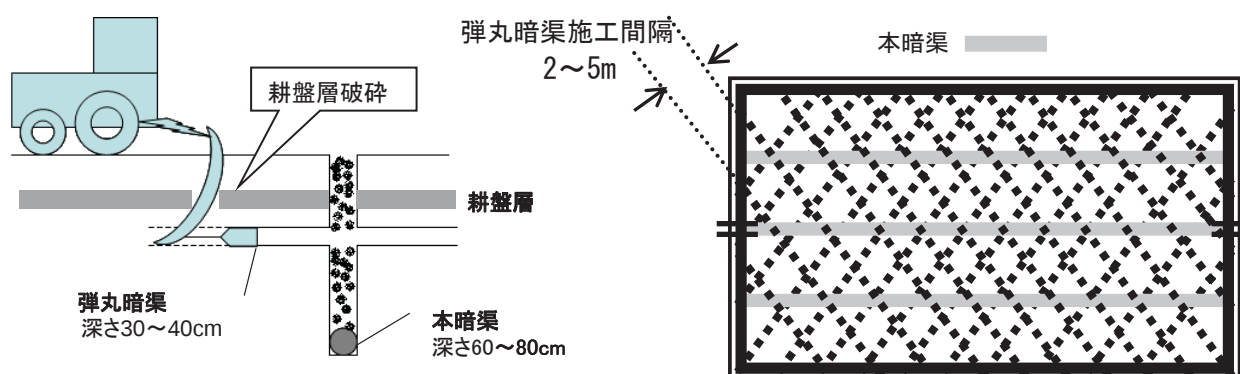
溝の深さが一定となるようにする。
連結部は手直しが必要



落水口との連結
と掘り下げ

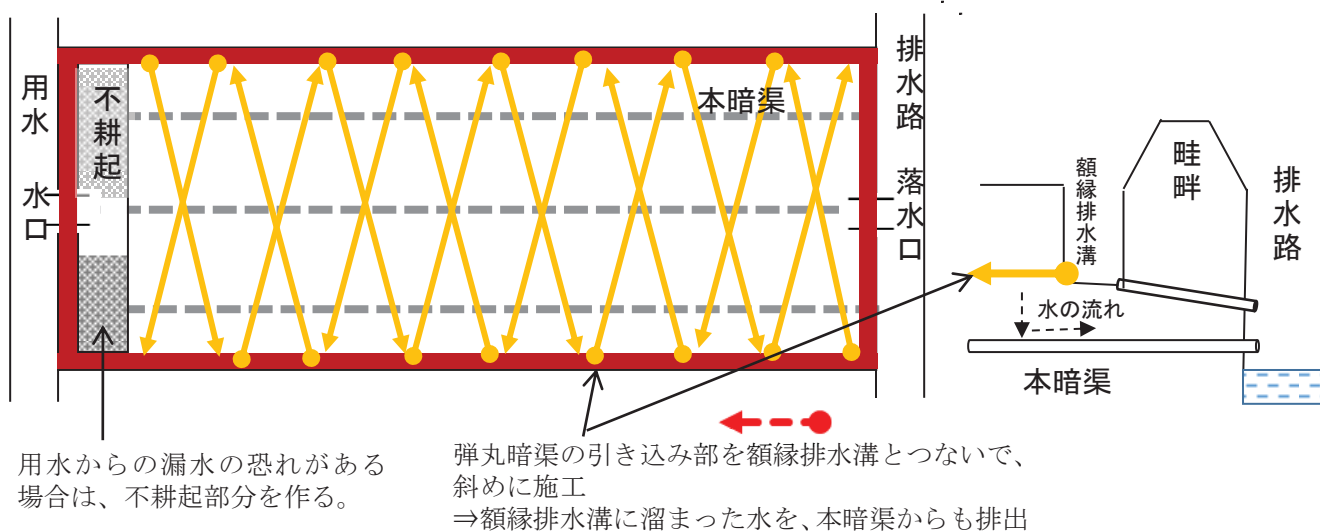
②弾丸暗渠（サブソイラを用いた簡易暗渠）の設置

- ・ 作土層直下の硬盤層を破碎し、地下排水性を向上するため、サブソイラ等で、本暗渠に対し、横方向または斜め方向に、深さ 30～40 cmの弾丸暗渠を 2～5m 間隔で設置する。

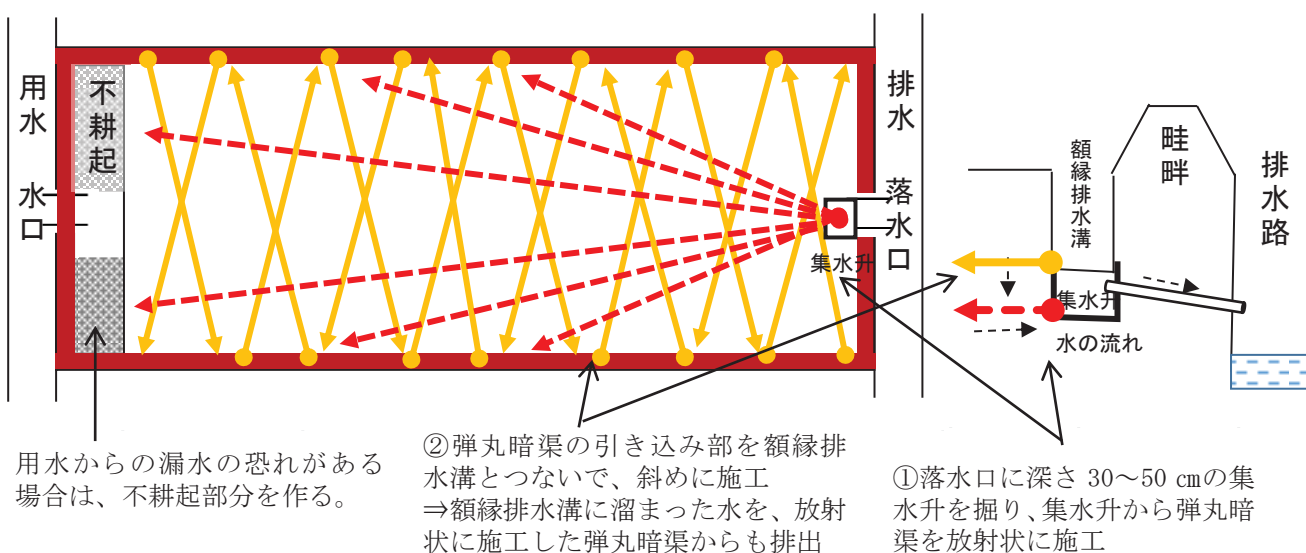


<ほ場条件に応じた効果的な弾丸暗渠の施工例>

i) 本暗渠が機能している場合 (■ 額縁排水溝 ←● 弾丸暗渠)



ii) 本暗渠がない場合 (■ 額縁排水溝 ←● - - - ● 弾丸暗渠)



(3) 雑草対策

- ・ 前作終了後、定植まで1ヶ月以上ある場合、(ほ場に雑草の種を落とさないため) 発生した雑草をプラウで粗耕起し、すき込む(ただし、ロータリーによる耕起は、降雨後、ほ場が乾きにくくなるため、行わない)。
- ・ 粗耕起後、雑草が発生したら、発生初期に、ラウンドアップマックスロード等で枯殺する。



プラウによる粗耕起



除草剤処理後のほ場

(4) 施肥・耕起・うね立て

※耕起後、降雨に遭遇すると、ほ場が乾きにくくなり、碎土率が低下するので、必ず、耕起～うね立ては、ほ場が乾いている時に、一連の作業として行う。

①施肥（定植直前）

- ・発酵けいふんと苦土石灰は、耕起前に、ライムソワー等を使用しムラ無く均一に散布する。
- ・基肥の化成肥料は、うね立て時に、うね内施肥機を用いて、うね内施用する。

◎【追肥2回体系】施肥例 (kg/10a)

肥料名	基肥	追肥		成分量		
		① 定植10日後	② ①から10日後	N	P	K
発酵けいふん	100					
苦土石灰	150					
硝加磷安 333	120			15.6	15.6	15.6
やさい磷加安 S540		40～50	40～50	12.0 ～ 15.0	11.2 ～ 14.0	8.0 ～ 10.0
合計				27.6 ～ 30.6	26.8 ～ 29.6	23.6 ～ 25.6

◎【追肥1回体系】施肥例 (kg/10a)

肥料名	基肥	追肥		成分量		
		① 定植10日後		N	P	K
発酵けいふん	100					
苦土石灰	150					
硝加磷安 333	120			15.6	15.6	15.6
追肥一発(14-14-14) (グッドI B入り)		90～105		12.6 ～ 14.7	12.6 ～ 14.7	12.6 ～ 14.7
合計				28.2 ～ 30.3	28.2 ～ 30.3	28.2 ～ 30.3

②殺菌剤散布

- ・耕起前にフロンサイド粉剤(40kg/10a)をライムソワー等で、又はフロンサイドSC(薬液量500ml/10a、希釈水量100～200ℓ/10a)をブームスプレーヤー等で均一に散布し、土壌混和する。

③耕起・うね立て

- ・ 活着・初期生育の促進と生育の斉一化、除草剤の効果安定を図るため、耕起は、トラクターの車速はゆっくりと、ロータリーの回転は高速で行い、碎土率を高める。
- ・ うね幅 150cm、うね上面 95cm 以上、うね高 30cm 以上となるようにうねを立てる。

④除草剤散布（定植前）

- ・ 長雨が予想され、作業計画上、定植が先のほ場もまとめてうね立てを行う場合（うね立て～定植まで2日以上が開く場合）、うね立て直後に、クレマート乳剤（400ml/10a、希釈水量 150ℓ/10a）を全面土壌散布する。

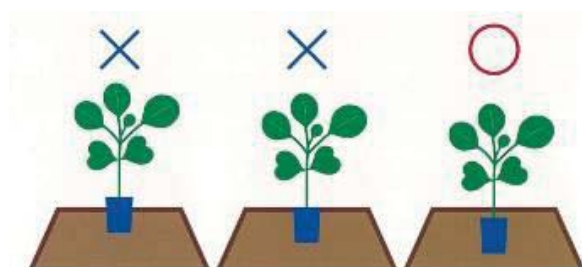
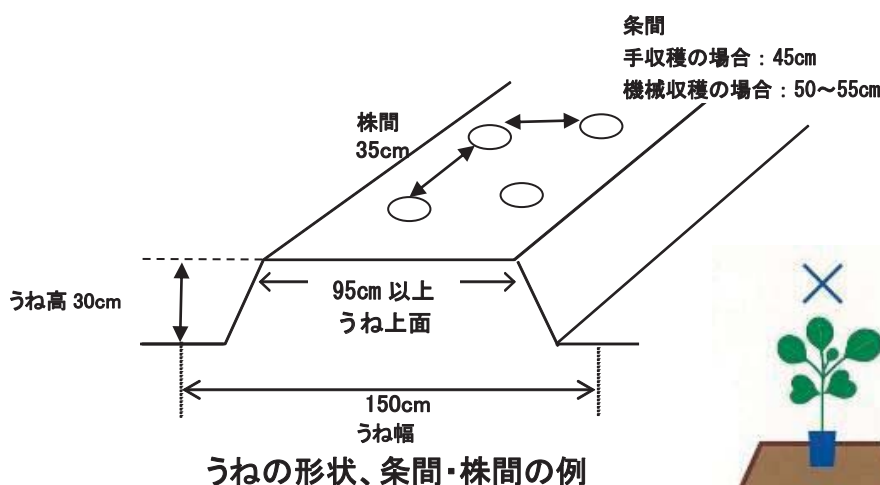
（５）定植及び定植直後の管理

①定植苗の準備（殺虫剤・殺菌剤かん注）

- ・ 育苗後半に、ジュリボフロアブル（200 倍液）を苗箱 1 箱当り 500ml かん注する。
- ・ 定植当日に、オリゼメート顆粒水和剤（100 倍液）を苗箱 1 箱当り 500ml かん注する。

②定植

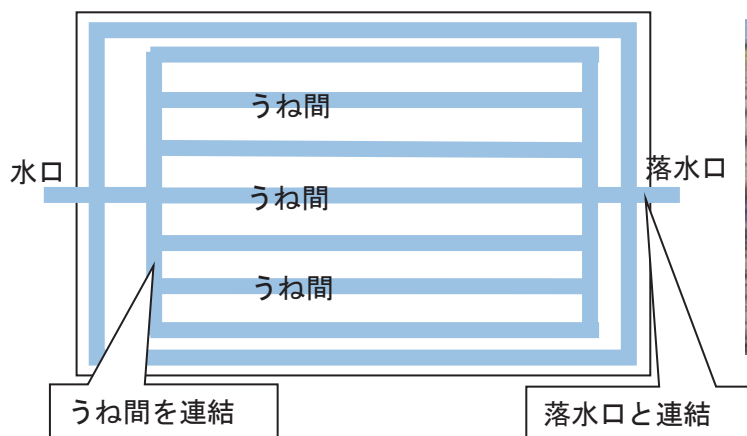
- ・ 定植は、高温時や風の強い日を避ける。
- ・ 株間 35cm の 2 条千鳥植えとする。
- ・ 極端な小苗や病虫害が発生している苗は、定植しない。
- ※苗質が不揃いの場合、半自動移植機で、苗を選別しながら定植するか、全自動移植機を使用する場合は、事前に苗の入れ替えを行う。
- ・ 機械定植の場合、鉢の上に 1 ～ 2 cm 覆土されるように植え付け深さを調整し、育苗床土が見えないようにする。



※生長点が埋まる程度の深植えになると生育抑制や薬害が発生するので注意する。

③定植直後のかん水

- ・ 定植後、活着を促進するためうね間かん水を行う。
- ・ ほ場全体のかん排水がスムーズに行われるよう、管理機等で、水口、うね間、落水口の連結をしっかりと行う。
- ・ かん水は、夕方、地温の低い時間帯に行い、うねの高さの半分程度まで水が行き渡ったら、落水する。



定植直後のうね間灌水

④除草剤散布（定植（かん水）後）

- ・ 定植翌日（うね間の水が引いたら直ち）に、まず、アグロマックス水和剤を散布し、翌日、フィールドスターP乳剤を散布する。

※両剤の散布間隔は2日以上あけない。

※薬害の発生の恐れがあるため、混用はしない。

薬剤名	適用雑草	使用時期	薬量 希釈水量	使用回数 使用方法
アグロマックス水和剤	一年生雑草（ <u>ミカド科</u> 、 <u>カツリガサ科</u> を除く）	定植直後 雑草発生前	200～300g/10a 100L/10a	1回 全面 土壌 散布
フィールドスターP乳剤 ※適用土壌：砂土を除く全土壌	一年生雑草（ <u>アザミ科</u> 、 <u>アブら科</u> 、 <u>ヤブ科</u> を除く）	定植後（雑草発生前） 但し定植後10日まで	50～75ml/10a 100L/10a	1回 全面 土壌 散布

※薬害防止のための留意事項

- ・ 砂土での使用は避ける。
- ・ 薬液が細かく霧状になって付着しないよう、散布圧を低くする（10kgf/cm²以下）とともに、薬液が水滴状となるノズルで散布する。
- ・ 軟弱徒長苗、老化苗では使用しないでください。
- ・ 散布直後に降雨に遭遇しないよう、天気予報を確認して散布する。
- ・ 均一に散布し、重複して散布する部分がないよう注意する。

(6) 追肥

①基本追肥

- ・ 1 回目は定植後 10 日頃、条間に施用する。
- ・ 2 回目は 1 回目の 10 日後に、うねが葉で覆われる前に施用する。既に覆われている場合はうね肩に散布する。

◎追肥例（2 回体系）

回数	目安の時期	肥料の種類	施用量 (kg/10a)
1 回目	定植 10 日後	やさい燐加安 S540	40～50
2 回目	定植 20 日後	やさい燐加安 S540	40～50

◎追肥例（1 回体系）

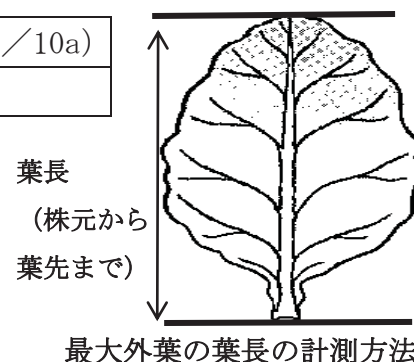
回数	目安の時期	肥料の種類	施用量 (kg/10a)
1 回目	定植 10 日後	追肥一発(14-14-14) (グッド I B 入り)	90～105

②追加追肥

- ・ 定植 30 日後に生育中庸な株を数株調査し、最大外葉の葉長が 30cm 未満の場合は、直ちに追加追肥を行う。

目安の時期	肥料の種類	施用量 (kg/10a)
定植 30 日後	やさい燐加安 S540	30

※追肥場所：条間（条間が葉で覆われている場合はうね肩）



(7) 除草剤散布（定植 2～3 週間後（雑草発生始期））

- ・ キャベツの外葉が生育し、うね面を覆うまでの生育初期の除草を徹底する。
- ・ 定植 2～3 週間後頃に、ほ場を見回り、うね間に雑草の発生が見られる場合は、速やかにバスタ液剤等をうね間に散布するか、中耕除草機で除草する。
- ・ 雑草の生育が進むと、除草が難しくなるので、除草は遅れないよう注意する。

(8) 乾燥時のかん水

生育盛期（結球期）に土壤の乾燥が続くと、土壌中のカルシウムが根から吸収できず、カルシウム欠乏による縁腐れ症や芯腐れ症が発生する。

縁腐れ症等があるものを出荷すると、出荷先からのクレームや返品に至り、産地への信頼が著しく損なわれるため、絶対に発生させない。



カルシウム欠乏

- ① 事前準備：速やかに入排水できるように、水口、うね間、落水口の連結の手直しを行う。
- ② 実施時期：5日以上降雨が無いと予想され、日中、うねの溝が白くなり始めたとき。
- ③ 実施時間：気温が低くなる夕方に実施する。
- ④ かん水方法：水口を開けて入水し、うね高の1／3程度に水が溜まり、全体に水が行き渡ったら、水口を閉め、速やかに落水口を開けて落水する。
- ※ うね間かん水を行えない場合は、水溶性カルシウム剤（カルプラス 500 倍液）を葉面散布する。

（9） 防除

- ・ 13 頁の防除体系に基づき、定期的に防除するとともに、ほ場の見回りを励行し、病虫害の発生が見られれば、直ちに随時防除を行う。
- ・ キャベツは薬液が付着しにくいいため、散布液には、必ず、展着剤を加用する（加用量は、ボトルに記載されている使用基準を遵守する）。
- ・ 散布液の調製にあたっては、散布予定量の水に、溶けやすい順（展着剤＞乳剤・フロアブル剤＞水和剤）に薬剤を加用し、よくかき混ぜて、均一に希釈する（調製後はすぐに散布し、長時間、放置しない）。
- ・ 散布ノズルは、微細な霧状に散布できるものを用い（鉄砲噴口は薬液が十分に付着しないので使用しない）、株全体に薬液がしっかり付着するよう、十分な薬液量を均一に散布する。
- ・ 防除実施後、再度、ほ場を見回り、防除効果を確認する。

5 収穫

- ・ 10、11 月どりの場合は定植後 60 日頃を目安に、試し穫りを行い、しまり具合を確認してから、収穫日を確定する。
- ・ ほ場ごとに、数球切って、内部に縁腐れ症や芯腐れ症がないか確認する。
- ※ 試し切り場所・株：乾きやすい場所（落水口付近等）、収穫が遅れぎみの株等（縁腐れ症や芯腐れ症の発生が確認されたほ場は出荷しない）。
- ・ 収穫は一斉収穫を基本とし、結球しているもので一定の大きさ以上のものを収穫する。
- ・ 重労働を避けるため、運搬車の利用やトラクターの後ろにキャリアを付けるなどし、効率的な収穫作業を行う。
- ・ 外葉等の調製は、実需者が決めた出荷規格に基づいて行う。
- ・ 異物（土、雑草種子、ミミズ等）が混入しないよう、刈り取り時やコンテナ詰め時に確認する。



収穫時の運搬車の利用

<効率的な収穫作業の例>



①刈り取り

1 うねに2名ずつ、向いあって刈り取る。
刈り取ったキャベツは裏返してうね上に置く。

②回収

3列ずつ、うね上のキャベツを拾い上げ、
コンテナに詰める。
トラクターオペレーター1人、コンテナ詰め 1~2人、
拾い上げ 2~3人

作業効率の目安 : 16 コンテナ/6 時間 (作業人数 5~6 人)

<効率的な刈り取り方法の例>



出荷物につけない外葉を剥く。



球の直下に包丁を入れる
(一発仕上げ)。



裏返してうね上に置く。

<効率の悪い刈り取り方法の例>



外葉を多くつけて、刈り取り。



ムダな作業 (外葉とり (左) や軸の切り直し (右)) が発生



夏まき秋冬どりキャベツ防除体系

【10月、11月どり】

時期	時期	薬剤名	適用病害虫	10a 使用量 倍率	使用液量	使用時期	使用回数	備考
1	8月上～下	定植前	ジュリボフロアブル	アブラムシ類、コナガ、アオムシ等	200倍 (10a成型育苗トレイ1箱 当り0.5L)	育苗期後半～ 定植当日	1回	かん注
2	8月上～下	定植前	オリゼメート顆粒水和剤	黒腐病、黒斑細菌病	100倍 (10a成型育苗トレイ1箱 当り0.5L)	定植時	1回	かん注
3	8月上～下	定植前	フロンサイド粉剤	根こぶ病	30～40kg/10a	定植前	1回	全面土壌混和
4	8月上～下	定植後	アグロマックス水和剤	一年生雑草(アカ科、ガヤクサ科を除く)	200～ 300g/10a	定植直後 雑草発生前	1回	全面土壌散布 両剤を使用する場合は、薬害が発生するの で、混用しない
			フィールドスターP乳剤	畑地一年生雑草 (アザミ科・アブラナ 科・タデ科を除く)	75ml	定植後 雑草発 生前(定植後10 日まで)	1回	
5	8月下～ 9月中	3週間後	アフアームエクスラ顆粒 水和剤	コナガ、アオムシ、ハスモン ヨトウ、ハマダラメイト	1000倍	7日前	3回	経口毒性、経皮毒性 速効性、遅効性
6	9月上～9下	4週間後	ナレート水和剤	黒腐病	800倍	14日前	3回	
7	9月中～10月 上	5週間後	プレバソンフロアブル5	コナガ アオムシ	2000倍	前日	3回	摂食停止 残効性あり
			バリダシン液剤5	黒腐病	800倍	7日前	5回	
8	9月下～10月 下	7週間後	ハクサップ水和剤	コナガ アオムシ アブラムシ	1000～2000倍	前日	5回	合ピレ・有機リン 接触毒・食毒
			アミスター20フロアブル	菌核病、株腐病	2000倍	7日前	4回	
9	随時	強雨、大 雨後	カスミンボルドー	黒腐病、軟腐病	1000倍	7日前	4回	

※定植以降の殺虫剤、殺菌剤の散布時には、アブローチBI等の展着剤を加用する。

※フィールドスターP乳剤の砂土での使用は避ける。

※結球始期（9月下旬）以降で、乾燥時にうね間かん水を実施できない場合は、上表の散布液に水溶性カルシウム剤（カルプラス500倍液）を加用する。

R2 加工キャベツ(夏まき秋冬どり)作業マニュアル兼適期作業チェックシート(暫定版)

経営体名:

ほ場名

品種

面積

100a

面積を入れれば、全面積作業時間や必要作業日数が表示されます。

作業時期	作業項目	具体的作業内容	10a あたり 作業 時間	全面積 作業時間	必要作業 者数	必要作 業日数	作業実施実績				
							月	日	作業面積	作業時間	作業者数
7月	育苗	□育苗床(ベンチ)準備、遮光ネットの展張	1	10	1	1.25					
		□は種(セルトレイに床土を均一に詰め、1粒/セルずつは種、均一に覆土)	2	20	1～2	2.5					
		□2晩、格納庫等で、芽だし	0.25	3	1	0.313					
		□育苗床(ベンチ)に搬出(水稲育苗箱の場合、育苗箱を裏返した上にセルトレイを置く)し、たっぷかん灌水	0.25	3	1	0.313					
		□毎朝、灌水(昼前に確認し、乾いていれば、再度かん水)	4	40	1	5					
		□液肥(やさい磷加安S540の500倍液等)散布(は種後15日、20日)	0.25	3	1	0.313					
		小計	8	78		10					
前作終了後～ 定植まで (6～7月)	ほ場準備	□排水良好なほ場の選定				0					
		□排水対策(額縁排水溝、弾丸暗渠の施工、排水溝と水尻の連結)の実施	1	10	1	1.25					
		□雑草の枯殺(ラウンドアップマックスロードの散布又は、粗耕起)	1	10	2	1.25					
		小計	2	20		3					
定植直前 (8月)	施肥・耕起・ うね立て等	□発酵けいふんを100kg/10a散布	1	10	1	1.25					
		□苦土石灰を150kg/10a散布	1	10	1	1.25					
		□フロンサイド粉剤(40kg/10a)、又はフロンサイドSC(薬液量500mℓ/10a、希釈水量100～200ℓ/10aを均一に散布	0.5	5	1	0.625					
		□耕起(ほ場が乾いている時に、車速はゆっくりと、ロータリーは高速で、細かく砕土)	0.5	5	1	0.625					
		□うね立て(うね幅150cm)	2	20	1	2.5					
		□うね内施肥(硝加燐安333 120kg/10a)	5	50		6					
8/5～8/25	定植	□育苗後半、苗にジュリボフロアブル(200倍液、500mℓ/苗箱1箱)をかん注	0.5	5	1	0.625					
		□定植当日、苗にオリゼート顆粒水和剤(100倍液、500mℓ/苗箱1箱)を灌水									
		□株間35cm、2条千鳥に定植(全自動定植機)	1	10	2	1.25					
		□うね立て後、うね間と排水溝を連結(水口・落水口と排水溝の連結も確認)	2	20	2	2.5					
		□定植当日の夕方うね間かん水、うね高の半分まで水が行き渡ったら、落水	1	10	1	1.25					
		□かん水翌日にアグロマックス水和剤(薬量300g/10a、希釈推奨100ℓ/10a)を散布	2	20	2	2.5					
		□翌日、フィールドスターP乳剤(薬量75mℓ/10a、希釈水量100ℓ/10a)を散布	2	20	2	2.5					
		小計	9	85		11					
定植10日後	追肥①	□やさい磷加安S540を40kg/10aを条間に施用	1	10	1	1.25					
定植2週間後	除草	□雑草が発生している場合、バスタ液剤(薬量300～500mℓ、希釈水量100～150ℓ/10a)等をうね間散布	4	40	2	5					
定植20日後	追肥②	□やさい磷加安S540を40kg/10aを条間に施用(既に条間が外葉で覆われている場合はうね肩に施用)	1	10	1	1.25					
定植3週間後	防除①	□アフームエクセラ顆粒水和剤1000倍を150ℓ/10a(展着剤加用)散布	1	10	1	1.25					
定植4週間後	防除②	□ナレート水和剤800倍を150ℓ/10a(展着剤加用)散布	1	10	1	1.25					
定植30日後	追加追肥	□最大外葉長が30cm未満の場合は、やさい磷加安S540を30kg/10aを条間に施用	1	10	1	1.25					
定植5週間後	防除③	□プレバノンフロアブル5 2000倍、バリダシン液剤5 800倍を200ℓ/10a(展着剤加用)散布	1	10	1	1.25					
定植7週間後	防除④	□ハクサップ水和剤1000～2000倍、アミスター20フロアブル2000倍を200ℓ/10a(展着剤加用)散布	1	10	1	1.25					
豪雨・大雨後	防除(随時)	□カスミンボルドー1000倍を200ℓ/10a(展着剤加用)散布	1	10	1	1.25					
乾燥時	うね間かん水	□夕方うね間かん水、うね高の半分まで水が行き渡ったら、落水	1	10	1	1.25					
		小計	13	130		16					
定植後60日頃	収穫	□一斉収穫、コンテナへ詰める	30	300	5～6	37.5					
		□運搬、計量	4	40	2	5					
		小計	34	340		43					
合計			70	703		88					

排水対策のための野菜作付予定ほ場調査及び対策早見表（案）

1 調査日 平成 年 月 日

2 調査経営体名

3 調査ほ場地番

4 作付予定品目

5 調査項目及び排水対策方法

（１）ほ場周辺の確認項目

①作付予定ほ場の湛水田と隣接状況

隣接していない

☐

隣接している

☐

②用水からの漏水状況

漏水はない

☐

漏水している

☐

③道路からの雨水の流入の可能性

流入はない

☐

流入の可能性あり

☐

☐ 不耕起地帯を作る

（２）ほ場内の確認項目

調査項目 (□を調査、記入)	対策	施行方法 (選択)
①田面から落水口底面までの落差 cm		
30cm以上あるか		
はい		
いいえ		
②田面から排水路の水面までの落差 cm		
40cm以上あるか		
はい		
いいえ	畦畔を割って排水口を作れるか	
いいえ	いいえ	営農排水困難 ほ場の変更
はい		
③礫層の田面からの出現位置 (検土杖等で確認)	(畦畔を割って) 深い排水口施工	A
cm	徹底した地表排水 額縁明渠・高畝	B
0～40cmの間	額縁明渠 + サブソイラ (斜めがけ・礫層まで)	C
50cm以下またはない	額縁明渠 + サブソイラ (斜めがけ)	D
④本暗渠の敷設（あり、なし）	あり	
	なし	E

排水対策のための野菜作付予定ほ場調査及び対策早見表（案）

施工方法	平面図	側面図
A	畦畔を割って 深い排水口施工	畦畔を割って 深い排水口施工
B	深い額縁排水溝 を掘る	深い額縁排水溝 を掘る
C	石礫層までサブソイラを施工	石礫層までサブソイラを施工
D	深くサブソイラを施工	深くサブソイラを施工
E	深くサブソイラを施工 放射状にサブソイラを施工	深くサブソイラを施工 放射状にサブソイラを施工